

節目節目に得られた 珠玉の言葉に触れる

プロ野球という厳しい勝負の世界の一線で戦い続ける。
そこには人を育てる理論と不屈の精神、そして心揺さぶる言葉があった。

岸本知事(以下岸本) ●福岡ソフトバンクホークスの監督就任、おめでとうございます。小久保さんは和歌山市出身で、プロ野球選手として大活躍されました。一方、和歌山の少年野球のために「小久保杯」という大会を開催されており、今年で20年目になりますね。子ども達が目を見ながら小久保さんからノックを受けている様子を見ると、子ども達が誇りに思える地元出身の方がいるのはいいことだなとも思います。

小久保裕紀(以下小久保) ●ありがとうございます。小学校1年生から野球を始め、硬式に移り、プロに入ったわけですが、何か恩返しをしたいと思い、「小久保杯」を始めました。子ども達のために始めた大会ですが、ずっとやっていて、僕らの現役時代を知らなくても、子ども達の中に僕の名前が残っているようで、嬉しく思っています。

岸本 ●ホークスの2軍監督を2年された今シーズンからは1軍の采配を振るうことになりました。チームを育てていくうえで一番大事にされていることは何でしょうか。

小久保 ●チームプレーが成り立つためには、チームとして守るべきルールを設定する必要があります。選手はそれぞれ育った環境も価値観もバラバラで、教えてきた野球も異なります。だからホークスの野球はこういう野球なのだと



知事対談

小久保裕紀 × 岸本周平
福岡ソフトバンクホークス監督 × 和歌山県知事

いうルールづくりを最初にしました。例えば、寮には選手100名以上が生活していますが、自分1人ぐらいたったら良いだろうとスリッパを脱ぎ放しにする

岸本 ●スリッパ200個が並びます。そして清掃の方が、一旦それを片付けて掃除し、また元へ戻す。目の前に下駄箱があるのに迷惑なことです。2軍監督になったときに最初に作ったルールが「スリッパは下駄箱にしまいなさい」ですよ(笑)。

岸本 ●小久保さんの指示はとても具体的に聞こえました。

小久保 ●例えば「甲子園に行かれたことがありますか？」と聞くとします。高校球児として行ったのか、阪神巨人戦を見に行ったのかわからないですよ。ね。高校球児として甲子園に出場されたことがありますか？と質問しなければならぬのです。相手が選手であれば「ウォーミングアップをきちりしなさい」といった指示ではダメなんです。100人いたら100人なりのきつちりがあるので、「置かれたマーカーマスター」が必ず走る」とか「フライングしない」といった具体的な指示が必要です。チームとしてのルールを決めておかないとこれはまとまりません。

岸本 ●私もそれは反省しなければなりません。どうしても指示が曖昧になる相手もわかっているだろうと。わかっているわけじゃないんですよ。

チャレンジしないことが一番成長を妨げる

岸本 ●もう一つ共感したのが「ドライアル・アンド・エラー」という言葉です。実は私も知事に就任した直後、職員の方々に「失敗してもいいからまず挑戦しよう」という意味で同じ言葉を使いました。小久保さんの場合はどういう趣旨でしょうか。

小久保 ●まずやってみる。そして上手くいかなかったら、その原因を考えて、またチャレンジすればいい」ということです。失敗したら恥ずかしいとか、怒られるとか、そんなことはありません。もちろんボーンヘッドや全力を出さなかったことに対しては叱ります。しかし打てなかったことや打たれたことでは怒りません。選手には「チャレンジしないことが一番成長を妨げることになるので、心配せずにチャレンジしなさい」と話しています。

み重なる大きな成果が得られます。そして小久保さんも言われるように、上手くいかなかったからといって叱らないんですよ。『残念、ナイストライ』って。誤ったやり方で『カイゼン』を導入した会社では上司が怒るんです。そうすると提案しなくなりますよね。そういうのを学んで、県庁でも取り入れています。

最後は歯を食いしばって 踏ん張る反復練習

岸本●言わなくてもできる人っているじゃないですか。一方、言ってもなかなか届かない人達もいるのですが、必要なのはやっぱり総合的な戦力ですから、一人ひとりに輝いてもらわなければなりません。その辺はどのように指導されているのでしょうか。

小久保●実力のある選手は自分で考えて勝手にやれるので邪魔をしないようにしています。でも実力の足りない選手には、ある程度指導しなければならぬわけですね。今の選手達には数字で示すのが一番で、昔のように経験や感覚で指導するのはタブーになっています。感覚って人に教えられるんですよね。現在では打球の角度や速度、バットの軌道、スイングスピードなど全てを数値として見る事ができます。だから測定結果を見せて、「この数字を上げるためにはこの練習が必要だ」といった指導をします。『バットを振

りなさい。ダッシュしなさい』では選手は動かない時代になりました。

岸本●小学生の頃から柔道をやっていたのですが、練習中は水を飲むとか昭和の根性論でやっていました。しかし今の若い人にはそのような科学的で合理的な方法を取ったほうがやる気を出してもらえるのでしょうか。

小久保●ただ、最後は歯を食いしばって踏ん張ることができない選手は伸びません。緊張した試合の緊迫した場面で打席やマウンドに立った時に、自分が持っている悪い癖を消すのには、『反復練習』しかないですよ。反復練習を抜きにして『型』は手に入りませんし、反復練習を嫌う選手はトップには上がってこれません。

岸本●やはり最後は頑張るって練習しなければならぬことですね。

小久保●そうです。投手がボールを投げ

を捨てよ」という言葉をもらいました。『修行から感じたことが一番大事で、成し遂げたこと自体が素晴らしいことではない』という意味です。2000本打って名球会に入ったから偉いのではない、実績を振りかざしながらこの先の人生を歩んだら間違えますよって。有頂天だった気持ちもポーンと折ってもらえたようでした。

岸本●人生に無駄なことってないですね。私も高校生の時、数学の先生に、『良いことがあれば必ず悪いことがある。だけども悪いことがあれば必ず良いことがある。だから悪い時にはよくよくよくなっていいし、逆に良い時は調子に乗ってはダメだ』と言われたことが心に残っています。

小久保●小学1年生だった時の監督にいただいた手紙が最近出てきて、晴れの日はばかりは続かない。雨の日もある。でも雨の日ばかりも続かない、その後また

が、何度も這い上がってこられました。

小久保●最初の頃は、調子のいい時に限って怪我をしていたので、『どうして自分だけこんな目に遭わないといけないんだ』と思ったこともありました。しかしリハビリ中に学んだことはすごく生きていますし、離脱の回数が多ければ復帰の回数も多いので、復帰を拍手で迎えてくれたファンやリハビリを支えてくれたスタッフ、ドクターのことは今もよく思い出します。そういった経験をして、『人生で自分に降りかかることは必然で必要なんだ』と思えるようになりました。

岸本●8回骨折して8回手術されたと聞きました。

小久保●練習のし過ぎだったんですよ。靭帯が耐えられなくなって切れてしまつて。右バッテリーって首を左に向けて打つので、首の骨が成長して神経を圧迫するんです。大きな手術だったので、麻酔から覚めて体が動いたときはほっとしました。

行を終えたら行を捨てよ

岸本●そんな経験をすると精神的にもタフになるでしょうし、宗教的な悟りにも似ていますね。

小久保●そう思わない限り、前には進めなかつたと思います。千日回峰行という過酷な修行をされた大阿闍梨の塩沼亮潤さんとご縁があり親しくさせてもらっています。引退した時に、『行を終えたら行



小久保裕紀

福岡ソフトバンクホークス 監督
和歌山市生まれ。和歌山県立星林高等学校から青山学院大学へ進学し、1992年バルセロナオリンピック銅メダル、1993年主将として青山学院史上初の大学野球日本一に貢献。プロ現役時代、福岡ダイエーホークス・福岡ソフトバンクホークス、読売ジャイアンツに所属。2013～2017年侍ジャパン監督。2022年シーズンからは福岡ソフトバンクホークス2軍監督を務め、2024年シーズンより一軍監督。



知事対談

小久保裕紀 × 岸本周平

福岡ソフトバンクホークス監督 和歌山県知事

て打者が打つまで0.4秒くらいと言われていますが、スイングに0.2秒かかるので、0.2秒しか判断する時間はありません。人間は見ているから、見てから打つのは不可能なんです。だからある程度予測してバットを振るのですが、そのためには反射を鍛えなければならず、反復練習が必要なんです。目標までの最短距離はわかっていても練習の回数をこなさないと一流にはなれません。

岸本●体験と経験が違うっていうのはそういうことですね。

小久保●『体験』って思い出で終わるじゃないですか。一方、『こういふところが良かった』『ここを改善しましょう』といった第三者によるフィードバックが入るのが『経験』です。独りよがりの『やりました』というのは、本を読んだだけで行動しなかつたり、YouTubeで理論だけ頭に入れて反復練習をしないと一緒です。成長するためには『経験』が必要ですよ。

人生で起ることは 必然で必要なんだ

岸本●小久保さんは2000本安打にベストナイン、ゴールデングラブ賞など輝かしい経歴をお持ちですが、むしろ守備位置から全力疾走でベンチに帰る姿やガッツのあるプレーが印象に残っています。怪我や故障も多くて苦勞されました。

晴れる。人生とはそういうものなんだ』と書かれています。母がずっと取ってくれていたのですが、今振り返ると、人生の真理みたいなものをその時に伝えてくれていたんだなあと考えます。

岸本●たくさん本も読み、多くの方のお話を聞かれています。母が、やはりインプットを大切にされているのでしょうか。

小久保●はい。そこは意識しています。同時にアウトプットも大事にしています。学んだことはすぐにやるし、人に伝えるようにしています。人に上手く伝えることができる。立場が下の人に教えたならその人がすぐに伸びるからもういいって言う人は、すぐに抜かれてしまふと思うんですよ。教えることによって、自分がもう一段上がれますし、新しいことを学ぶスペースもできます。難しいですけど欲しけりゃ捨てる。『こういうことなんですね。実は人としての器というのは決まっています、その器にいっぱいになった水を捨てる勇氣があるかどうかだ』ということなんです。高校の大先輩である松井優典さんには『スポンジになれ』と言われました。次に進むにはカラカラのスポンジにならなければならぬ。水がヒタヒタなら何も染み込まないという意味でした。節目節目に素晴らしい言葉をいただけて、とても感謝しています。

岸本●本日はすごく勉強になりました。ありがとうございました。

